

かもしか

人
 を
 斬
 る
 舌
 か
 二
 三
 夫

公
 なる
 心
 白
 わ
 ら
 か
 し



1984/8

かもしか川柳社

第三十八回青森県川柳大会

とき 九月三十日(日) 午前十時から
 会場 青森市 東奥日報社本社ホール
 会費 二〇〇〇円(記念品・昼食代)
 特別選「水」二句 去来川 巨城選
 神戸「ふあうすと」主幹
 ・ハガキ大の用紙に句と住所 氏名、懇親会の出欠明記。会費を添えて、青森市新町二丁目 東奥日報社事業部「県川柳大会」係あて、九月一日(必着)のこと
 宿題と選者 各題二句 当日持ち込み
 「雲」 西谷 みさを
 「樹」 宮本 紗光
 「群れ」 中林 瞭象
 「旅先」 西塚 春魚
 「洗う」 小山 吉朗
 「欄む」 柏葉 みのる
 「風の如く」 野呂 背太郎
 席題選者(三題 二句吐・当日出題)
 高田寄生木 杉野草兵 西山金悦
 工藤寿久 三浦宗一 松原ひさ恵
 村井吉重 上野しん一 北野岸柳
 懇親会 二〇〇〇円
 主催 東奥日報社

第13回かもしか誌上全国川柳大会

課題と選者
 塩見一釜(札幌) 花南井可(熊谷) 藤井比呂夢(新潟) 渡辺和尾(愛知) 田口麦彦(熊本) 柏葉みのる(むつ) 狩守和穂(八戸) 工藤寿久(弘前) 石川重尾(静岡) 樋口仁(四日市)
 血
 出題 藤田遊喜 (気仙沼)
 会費 九百円(60円切手16枚可) 誌呈賞
 正賞・準賞作品は津軽漆桶を贈呈 そのほかの優秀作品、各選者別の特選句、合点十傑など。上位の一賞を呈上。同点は投句先着を優先
 「次回の題募集」漢字一字。
 締切 昭和五十九年九月三十日着便
 宛先 030青森市松森字佃一四〇一〇〇 吉田州花方
 かもしか川柳社松森編集室

かもしか八月号もくじ

正賞	酒谷 愛郷	二
準賞	古谷 恭一	三
準賞	海地 大破	四
選後感	柴田 午朗	一一
選後感	山村 祐	一二
選後感	時実 新子	一四
選後感	奥室 数市	一五
選後感	橋高 薫風	一六
選後感	尾藤 三柳	一七
選後感	寺尾 俊平	一八
選後感	片柳 哲郎	一九
選後感	泉 淳夫	二〇
選後感	杉野 草兵	二〇
北の角笛④	村田けん一	二二
かもしか集(182)		二二
すぼつとらいと(141)		二六
北貌集⑥	杉野 草兵	二九
針葉樹林①	小野 公樹	三七
眠れぬ夜に⑦	野沢 省悟	四〇
一葉集①	柏葉みのる	四二
柏亭独語④	柏葉みのる	表三
表紙レタリング⑬	北野 岸柳	表一

第二回川柳Z賞発表

☆正賞 (十万円・津軽漆桶) 佐賀県伊万里市 酒谷 愛郷
 ☆準賞 (二万円) 高知市 古谷 恭一
 準賞 (二万円) 高知県十佐市 海地 大破
 ☆秀逸 (図書券千円) 岩手県胆沢町 佐藤 岳俊
 秀逸 (図書券千円) 青森県弘前市 工藤 寿久
 秀逸 (図書券千円) 青森県蟹田町 北野 岸柳
 川柳Z賞選考委員会

第一次選考(各選考委員五人以内推せん)

☆宮 本 紗 光 推 せん
 ・新井笑葉 ・桑野晶子 ・小野蛙人
 ・江尻麦秋 ・神谷三八朗
 ☆小 野 公 樹 推 せん
 ・須田尚美 ・吉田州花 ・須田尚美
 ・小林佐登流 ・山本忠次郎
 ☆工 藤 寿 久 推 せん
 ・須田尚美 ・海地大破 ・北野岸柳
 ・吉田州花 ・石田寿子
 ☆柏 葉 みのる 推 せん
 ・新井笑葉 ・海地大破 ・濱田玲郎

第二次選考(各選考委員五人以内推せん)

・野田伸吾 ・酒谷愛郷
 ☆高 田 寄 生 木 推 せん
 ・古谷恭一 ・桑野晶子 ・西川富恵
 ・佐藤岳俊 ・工藤寿久
 第二次選考
 ①古谷恭一 ②山本忠次郎 ③吉田州花
 ④工藤寿久 ⑤桑野晶子
 ☆柴 田 午 朗 推 せん
 ①佐藤岳俊 ②小野蛙人 ③海地大破
 ④野田伸吾 ⑤濱田玲郎
 ☆山 村 祐 推 せん

①酒谷愛郷 ②佐藤岳俊 ③海地大破
 ④須田尚美 ⑤桑野晶子
 ☆奥 室 数 市 推 せん
 ①海地大破 ②酒谷愛郷 ③古谷恭一
 ④桑野晶子 ⑤佐藤岳俊
 ☆橋 高 薫 風 推 せん
 ①北野岸柳 ②古谷恭一 ③酒谷愛郷
 ④工藤寿久 ⑤神谷三八朗
 ☆尾 藤 三 柳 推 せん
 ①海地大破 ②神谷三八朗 ③須田尚美
 ④桑野晶子 ⑤工藤寿久
 ☆寺 尾 俊 平 推 せん
 ①古谷恭一 ②北野岸柳 ③濱田玲郎
 ④桑野晶子 ⑤山本忠次郎
 ☆片 柳 哲 郎 推 せん
 ①酒谷愛郷 ②吉田州花 ③古谷恭一
 ④工藤寿久 ⑤西川富恵
 ☆泉 淳 夫 推 せん
 ①酒谷愛郷 ②佐藤岳俊 ③海地大破
 ④野田伸吾 ⑤工藤寿久
 ☆杉 野 草 兵 推 せん
 ①古谷恭一 ②酒谷愛郷 ③工藤寿久
 ④西川富恵 ⑤神谷三八朗

①酒谷愛郷 ②佐藤岳俊 ③海地大破
 ④須田尚美 ⑤桑野晶子
 ☆奥 室 数 市 推 せん
 ①海地大破 ②酒谷愛郷 ③古谷恭一
 ④桑野晶子 ⑤佐藤岳俊
 ☆橋 高 薫 風 推 せん
 ①北野岸柳 ②古谷恭一 ③酒谷愛郷
 ④工藤寿久 ⑤神谷三八朗
 ☆尾 藤 三 柳 推 せん
 ①海地大破 ②神谷三八朗 ③須田尚美
 ④桑野晶子 ⑤工藤寿久
 ☆寺 尾 俊 平 推 せん
 ①古谷恭一 ②北野岸柳 ③濱田玲郎
 ④桑野晶子 ⑤山本忠次郎
 ☆片 柳 哲 郎 推 せん
 ①酒谷愛郷 ②吉田州花 ③古谷恭一
 ④工藤寿久 ⑤西川富恵
 ☆泉 淳 夫 推 せん
 ①酒谷愛郷 ②佐藤岳俊 ③海地大破
 ④野田伸吾 ⑤工藤寿久
 ☆杉 野 草 兵 推 せん
 ①古谷恭一 ②酒谷愛郷 ③工藤寿久
 ④西川富恵 ⑤神谷三八朗

第二回川柳Z賞 正賞作品

佐賀県伊万里市波多津町

酒 谷 愛 郷

父の掌の雲がカラリと晴れている
海辺に生まれ 父もわたしも小使す
沼からの風が どうにも眠い父
狂いしは 一夜童子の 父太鼓
死ぬときに流れる さのさ 都々逸が
地に眠ろうか 木に登ろうか 父の助
父の死後 だあれも路地に火を焚かぬ
埋葬されし 数日後の 生欠伸
ゆえあって 石の地蔵の貌つくる
雲に乗ろうと丹念に足裏ふく
快快と鳴き ここ十年を 鴉でいる
病むは易し ゆうやけいろの褥を泳ぐ
十薬も母も みごとに 老い果てし
何の祭りか 病人を囲むなり
病母眠り 西に蟬の木 増えている
母弱る 冬の芒に 声かけられ
おくやみのひとり 芒の 匂いする

老鶴と あと四・五年を在えん
この木ゆすると風が生まれる 弟よ
葬儀屋が 午後から風になるという
涅槃図に いろいろなもの 運び入れ
火の向こう 芒 気配を消している
それ以来 猫が一匹 居座りぬ
風の日は留守と 戸口に貼っておく
芒ヶ原の石をいつでも持ち帰る
芒野にかかる たしかな時計見る
夢の中の 杭一本を 打ちあぐむ
いまもって 母はおらぬと 枯野たち
芒野に ついつい長居してしまっ
吾が影をいじめつくせし 影がゆく
かくて男に 鶴の祭りの 雪が舞う
鶴と遇って 男 笑わなくなっている
あーと椿を折りぬ 癖になる
椿に眼をそらされてから気にかかり

訥々しゃべり島の椿の眠ってしまっ
椿の下を通ってからの 笑い癖
月夜得て ちははは戻る 麦畑
亡母も上姉も 黙って雪を食っている
神が居座り 真ん中が 煙くてならぬ
日向にいと どざりと老婆投げこみぬ
父の代から暗い厠に点(とぼ)し立ち
見知らぬ貌が島の仏になり終(おつ)せ
亡母の魂か 家中を鶏あるく
桜ゆすって亡母出る空の 絵本いろ
蝶になるなら涙流して 母の墓原
母の墓の どこをゆすれば 春か
父の死後 風の酒屋の 沙汰がなし
水に手入れて むんずと握りかえされる
水流れ 春の家々 死者はなし
総ては明日の 木椅子が一つ 置いてある

第二回川柳Z賞 準賞作品

①

高知市仁井田二三八六―二九

古 谷 恭 一

終戦日 打ち上げられた藻の長さ
昭和史の未だ仏間の夏みかん
単火を払って喪服立ち上がる
仏像が転がる肉が鮫えはじむ
鐘撞いて森羅万象眠くなり
菩提樹に日が落ちゲリラまた誕れ
うたた寝の少年兵に蜜あふれ
はつきりと覚めた形の雲浮ぶ
わたくしを誰何している水鏡
瞑想のいつしか溜る杉落葉
昂ぶってきて一枚の葉を銜え
木の瘤が生れんとしてわが軋み
耳底で鎖が絡みついている
蛾の影に怯えつづける落武者で
まぼろしの一騎 牡丹を過ぎてゆく
蟄居した日々を数える竹細工
嫁はいないか嫁はいないか千枚田

やじろべえよりも傾く父と母
じゃがいもの転っている家を嗣ぐ
じゃがいもの貌 お父さんお母さん
てんでん手毬 ふり向いたのは老婆
一族は沼の向うで鼻を掘る
美しい館 ひっそり蛇が殖え
胎内の沖に十字架傾けり
告白の炎となりぬ蛇の衣
吊ランブ崩れるものがやってくる
復讐に行くべく眉を剃り落す
怨念の指そり返りそり返る
吊革を脂まみれにして犯す
見送ってしまったは只の火打石
パンドラの匣を落して虹消える
白昼の椅子を倒して遁走す
尋ね人 コップの水が張っている
セメントが固っている薄笑い

密約は成れり真鯛を真二つ
木の椅子にストンと落陣 裁かれる
蝙蝠が飛び交っている深い椅子
鱸雲 こむら返りの父である
この辺で父の背中をどんと突く
電柱に繋がれた犬 日が暮れる
共犯の目を十字路に向けている
月見草 暴走族の死を見つめ
形相はおだやか死後の櫓が行く
梟の言葉がふいに降りてくる
細雪 人形劇に灯が点る
寝袋の中から霧を吐きつづけ
曼珠沙華 目蓋は重く血は濃ゆく
石積んで右よりさむい膝がしら
合掌のまま千年の水結期
海亀の卵 銀河は遠くても

第二回川柳Z賞 賞品

②

高知県土佐市高岡町犬の場

海地大破

人間のかたちに土が盛ってある
 ひしめくは改札口のぼつふらよ
 ややゆるい春の蛇口は人捜し
 衰弱のはじまる縄が横たわる
 償いの木をふるさとに植えておく
 胃袋に煙突並ぶ父らの風景
 菜の花に身投げをはかるオウムかな
 地の果ての灯台守にあこがれる
 春の猫青の世界へひるがえる
 たましいが木の上であり木に登る
 夢売りの夢が欲しくて火を焚きぬ
 みみず誕生地の神とたわむれる
 月光を浴びて土管が横たわる
 悪人の帽子に耳が生えてくる
 泣いて笑って滑ってしまふ雀たち
 正直なトマトが雨に濡れている
 暗い目のなかをふるさと通り過ぐ

父の帽子は祈るかたちで水を汲む
 ははの忌の排卵一個漂よえり
 菜の花やでんでん太鼓妊りぬ
 鬼の面ずれて女の子が生まれ
 胎内の記憶の青い川流れ
 水子地蔵のそばに小さな虹が立つ
 臍の中の妻を見ている神をみている
 夏を病む人間臭き顔をして
 蟬の殻半身麻痺のてのひらに
 死ぬときはもがき続ける犬張子
 そこかしこ死者の手が浮く花の闇
 玉手箱の中にもきつと梅雨が来る
 つくり話の下手な鴉が横を向く
 黄昏れの喪の一族の皿洗う
 おんおん哭いて軒の仏は出てゆけぬ
 母逝って耳のうしろのさむい景
 病人にジョークの好きな鬼女である

少しずつ狂いはじめる妻の部屋
 樞打つまわりの闇を一身に
 下痢がつづいて木登りの下手な猫
 滑り台すべった傘が骨折す
 負け犬の酒をこぼしてしまひけり
 てのひらの湯呑みの軽い痛みかな
 木の股をコツンと叩く自嘲かな
 たましいは雪に滑って雪まみれ
 朱の腕の底で眠って目が覚めぬ
 狂院を出るたましいが振り返る
 深い情けで冬の案山子を横たえる
 座布団を重ねていくと彼岸かな
 大根を洗う月日をたんねんに
 放浪の茶碗の底の日本晴れ
 約束を守り通して紫に
 川沿いの情けを終の棲家とす

Z賞を受賞して

酒谷愛郷

嬉しさと戸惑いと

古谷恭一

感謝

海地大破

私と川柳とのかわり合いは、二十年前の闘病の折であります。当時、共に闘病生活を過ごしていた人から推められたのが縁で、それまで文芸に関しては、何の素養も下地も無かった私が、少しのためらいもなく「川柳」に入ったことは、今日、思い出してみても、私自身、不思議にさえ想われます。それは多分に、長期療養の退屈さと、できれば、川柳の趣味を持つことによって、悶々とした、闘病生活を、いくらかでも慰めたいと思う切なる祈りでもありました。そして、今日まで、幸いにも、多くの親しい友達にめぐり遇えることができました。十年前に、「藍」入会以後、例会の都度、私に宿を提供してくれる「野田伸吾」君。この彼の厚意によりまして、現在の私の「川柳」があると言っても、けっして過言ではありません。それと合わせまして、「藍」主宰泉淳夫が、身近に存在しているということも、私の、川柳創作、途上におきまして、望外の幸せであります。

Z賞準賞という思いもかけぬ知らせに、嬉しさよりも、何か大それたことをしてしまつた子供のように、戸惑いを感じている。私としては、特にZ賞を意識して創つたわけではないが、58年度中の自分の作品を寄せ木細工のように組み立て、さてこれが現代川柳としてどのくらい通用するものが、自分の位置はどのあたりから、何か試すような気持ちで応募したことを思い出す。昨年度受賞の海地大破さんに刺激されたこともあるが、まさか自分がその立場に立つとは思わなかった。つくづくその重みを感じる。

Z賞準賞入賞のご連絡をいただきありがとうございます。今回は、勉強の意味も含めて木馬ぐるぐる会員一同で応募してみようということになり、自分としては全く自信はなかったけれども、ぐるぐるを叱咤激励した責任上、応募してみました。結果は、古谷恭一君ともども準賞入賞を果たしたことで大いによろこんでいます。何よりも恭一君の入賞は、彼の不断の真面目な努力がもたらした結果で、木馬ぐるぐるの誇りだと思います。

私は、川柳を書けば書くほど自分の思いから遠ざかっていく搔痒感のようなものを感じています。完成された一句が得られないという絶望感が、私に川柳を放棄させずに思いを追求していくという原動力になっているようです。ともあれ川柳を書くという主題を早く発見して、自分自身の作品を書き切りたいと希っています。

その意味においても、準賞入賞をばねとして頑張っていきたいと思っておりますので、皆さんのご指導をお願いいたします。

これからもガンバリます。
 ありがとうございます。

第二回川柳Z賞・秀逸① (作品五十句より)

佐藤 岳俊

闇の中天折の馬走りだす
銅鐸の絵がとけてくる葉に座し
百姓の思想を抱ける泥落ち穂
墳輪の目のぞく宇宙の闇ひろがる
ひからびる田螺よ祖父の骨光り
泥桶を背負いもろとも田に沈む
腐葉土にかくれて生きる血のみみず
捨てられた子を抱きあげる人がいる
ばらばらとポケットに鳴る粉二つ
飢えた胃にちいさい土偶しまいこむ
神様の微笑吹雪の夜も生まれ
為政者の背にびょうびょうと休耕田

いつ冬になっても地中蟻ねむる
胃に妻子ぶらさげ渡る朽ちた橋
命日に人があつまるちいさい墓
ひょっとこもおかめも踊り泣いている
血管を流れてまるい粉の種
薬束でつつむ凍死の農の首
一本の蛇になるまで縄を縛う
飢えた胃で縄文の土器くみたてる
薬灰に光るちいさい野の日記
走らない馬のひずめが耳に鳴る
尾骶骨地に触れながら母歩く
薬ぐすに仮眠しはれの雪おんな

第二回川柳Z賞・秀逸② (作品五十句より)

北津軽郡葦野村

工藤 寿久

雪原に一声吠えて戸を閉める
母ほどの威器は持たぬインク壺
死者の背にざんぶと掛けるお立ち酒
靴下は脱がせてやろっ落ちリンゴ

親指を陽にも月にも隠しけり
狂い死にした蝸牛とは棟続き
出稼ぎの髭を剃らばや茄子の馬
はまなすもバラ科にあれば人嫌い

滅反の怒りを豚の胃へかくす
ひまわりの苾復員の父歩く
春の水俺を逆さに休耕田
人間が負け廢鶏の首を切り
桐の花とおい間引きの目でひらく
豊満な冬田へ立てる菓人形
継げるものひとつ身こもる雪おんな
落ち葉にもつづもれていく影ひとつ
人間の豊かさ縄文土器見つめ
薬灰よ底に唾液の矛盾論
飢死死養雪のごはんが降りてくる
夜明けだけ鳴く鶏を喉に飼う
農政に刺されて笑う豚の鼻
薬灰に残すちいさい遺書ひとつ
終焉の土ふかく病む農の骨

身体髪膚もち堪えんか蕎麦畑
哭いている人と並んで哭いてやる
一介の勢子 みぞおちは火山礫
直訴する首を素焼きの壺が待つ
喉もとへキリキリ放つ腹誹術
近道を嫌う石屋の稿木疋
往き斃れ 北津軽郡 葦野村
ブランコをしきりと揺らしちちと逢う

棒鱈の意地よ水などもうぐわぬ
鑑賞に値する絵は逆さ吊り
酒を酌ぐ指より鳩は出すじまい
親切な猿に見付かる縦結び
流刑地に花の頸落ち小泣き癖
柔かい痛みが好きで足袋を脱ぐ
三味線の一弦切れて雪が吹く
パチンコ代終日叩く溺死体

手火花を小胸にしまい火傷する
哺乳瓶より値が少し張る乳房
喪の家を跨ぎ目刺しを買いに出る
慈悲深い義姉が蜆の水を交う
後頭部くべてしまったどんと焼き
人一人死んでも通う珠算塾
詰め将棋してる柩は動かせぬ
泣き添えのうまい女と驢馬に乗る

第二回川柳Z賞・秀逸③ (作品五十句より)

北野 岸柳

敗者復活ならず罌粟植えた盆の窪
敗けてもともとと嘆みくたく止露丸
とっておきの影と居て十万億土
死ぬことなんどと気まずい闇たろう
金環食わが甚六の眸を洗う
風は曼陀羅津軽衆の眸と出逢う
父として負けてはならぬ紙相撲
神様を佃煮にしてメシを喰う
花束を非常階段から貰う
青津軽人も仏も頬かむり
流木であれば別離の刻も伏す
吹雪かれて伝話前略より綴る

空席を捜し続ける冬虫
往生となるやも知れぬ時報聴く
残飯の餓えかかりくる花供養
缶珈琲人妻の眸は溶け易き
捨て猫へ節博立てり我が凍土
旧姓の膝にけだるく花供養
行きずりの墓石にたわむ柵榴の朱
桜肉海へ女をいざなわん
生簀は妻と子洋燈の火屋磨く
白子煮る妻のメゾソプラノ軽き
神棚は白木造りで母の陰
待宵へがばりと口をあけしませ

鮫鱈の嫁は探しに田を走る
サボテンの花といっしょに目が落ちる
雪に掌を洗って耳を取り戻す
死にきって男は風の色になる
祭壇の地熱続きに義姉義妹
童巻となる前日も目を病みし
ここへ来て流木は兄にとり落す

友の死んだ岸壁魚がよく釣れる
ロリータの指紋を舐める目刺を嘔む
雪落ちる海キオキオと手淫する
唐黍の歯に絡み付く日の音叉
仮装行列男はとぼけたがるもの
影や影裸族の夕飼たりしかな
不眠症鴉と五目並べする
死に急ぐ頬刺だけの置き忘れ
父権またぼりと落とす貸衣装
耳飾り私の裡の放れ馬
みんな夢であれば駄菓子の手之余り
罪深き者より高く観覧車
罪で縛う縄キリギリと我がずぐり
衣紋掛踊りそこねた風を吊る
息絶える時の真似して復が減る

第二回川柳Z賞・佳作 (50句より)

北海道 桑野晶子

放浪がはじまる鉛筆を削る
餅ひとつふたつ縁の濃くうすく
一連託生一月の飯が吹きこぼれ
かなしみのまん中木魚の狂いなく
臆病な鬼で七草粥すする
菜の花を購う如月の虚言かな
ラインダンスがうまい二月のチョコレート
バターたっぷりごしょ芋も泰平な
ちちははの鱗刺きしや花吹雪
母の絵の一枚いもの煮ころがし
ふるさとはアニメの中の花いちもんめ
裸婦像の眸の中あるき遠く糸
割箸がきれいに割れる安楽死
不在投票箱一粒を置いてくる
すすき茫茫針山の針ぶつかり合つ
電卓をたたく無明のきさはしで
遠雷や清十郎と漂えり
紙人形めしいのままの幸せか
ラーメン横丁胡椒にむせぶ花言葉
真ごころを重ねあつ日のかくし味

第二回川柳Z賞・佳作 (50句より)

青森市 吉田州花

春が来て木馬は誰の連れになる
赤い実になった花から試される
さよなら三角 少しは痛む親知らず
綾とりの橋の上から子を捜す
白無垢の着せかえ人形にある枝毛
寒い夏 はずんだ手鞠受けそこね
一途なる竹の精なら唾になる
墮ちてゆく海の深さよ 汽車が出る
磨り硝子の向うの羽化と夕暮れる
嘘見抜く目ならばいらぬあほう鳥
土鈴あつめて たんぼの綿毛見ている
子はなれや一湖とさしてななかまど
綿菓子をはひとりで食べる やがて燃えさし
土用波待ちて終章書かれざり
ねんころり先に私が眠る闇
椿満開 秘めているには重すぎる
紫陽花や悪い女になるもよし
てるてる坊主明日雨なら 密かに
浅はかな女で夜毎のパズル解く
疑えずむかしむかしも遊女たり

第二回川柳Z賞・佳作 (50句より)

愛知県 神谷三八朗

泣き虫こむし島に残って泣ききれぬ
みにくいものの数を北へ並べて冬
冬の絵にする鈍痛な筆さばき
祈り疲れて大の字に寝てそれも独り
哀しみは言うものでなし途中下車
紅緒の下駄が馱者台に脱いである
まなうらにひと住めり春愁と辞書にあり
鏡の数にいる老いばれの中にいる
落武者の笛と知るべし二日月
雨たれの落ちる真下の言い伝え
夢売りますとあり駅長室不在
妻にのみ許して可なり殉死かな
欠けた皿にちよこんと盛ってある操
この町の桶屋も風を待っている
花の闇おんな狂いの血のゆくえ
葬儀屋に殉死の数をもう読まれ
山が崩れる旅人同志萩と撮る
譬え話のやたらと多い朝刊だ
曼珠沙華白叩きとて血を噴かん
淋しがりやでやっぱり耳掻きを作る

第二回川柳Z賞・佳作 (50句より)

埼玉県 須田尚美

ひたむきに逢いたくて乗る騙し舟
七転び八起きの果ての正誤表
喜劇とも思ふデイスコを受胎する
完璧な女が欲しい喉仏
熟年の手にあり余る古語辞典
酔うほどに本音で書ける果し状
切り口に魚拓幾枚子の忌日
火を擦って鯨舌になる蝸牛
森を出た時計があてもなく狂い
片目の魚ばかり描いてる落ちこぼれ
ときとして鬼が佇ってる葱畑
傷口に届く半端な花使り
概念をいくたび捨てる公定離
ナイフ一本かざすと見えてくる倫理
一族の灯の暗ければ鳴る雪崩
指切りを本音でしてる吹き溜り
桜満開すくと落ちてくる飯面
記念樹に地獄を吊すわが祭
五十男のヘソのあたりの桜桃忌
とてもクールに他人を裁く四捨五入

第二回川柳Z賞・佳作 (50句より)

ブラジル 小野蛙人

太陽は二つ抽斗にしまつのも一つ
髭が生える弁証法の囃(くしゃみ)
首塚へ艶歌を一つ置いてくる
一山いくらで売る明日の夢
玉を抱く埴輪の罪は問わない
標的になる向日葵のキザな顔
胎動するピカソの女の点と線
果てもなく迷う掌のひらの流離
沈下華よるの蝶呼ぶ宵浅し
ビキニ女の渚は悲しい風紋
星を盛るキラキラ秋の食卓
「父帰る」精液バンクより
枯野を喰いつくす鱈のいる白昼
雪女郎深夜の牀に逢いにくる
霧の壁貫き透る白い俺
白痴の空濁らせ君と僕という
だしぬけに来る使者深い夜の底
みんなに手錠を掛けてボクの休日
過剰防衛のネズミの狡さは買えない
蟻が担いだ天は重過ぎる

第二回川柳Z賞・佳作 (50句より)

福岡市 野田伸吾

鶴の天 さむい女を抱き寄せる
渡る風に人の名を呼ぶ 椿たり
遠景の鶴が描けぬ 一月 二月
想いの中の 青が薄れてゆくばかり
再び風と巡り逢つては 風とならん
淋しさの真ん中歩くとき 素足
またひとつの春を見送る 風の中
気だるい風が二月をんなの背に溜る
そして消えゆく風と契りし 少女たち
ここに哀しい女が生(あ)れる 風の橋
朝の風 尽しつづける 女の指
風花や 昨日に戻る 何もかも
風の街 寒い女が殖えては逝く
男と女 不確実なる 風の明日
逃れきれない女がここに 風花す
深い想いの一期一会の風さがす
我が前後に雪を降らせし 風になる
耳裏に 踊る風 狂えと云う
我が肋 ヒタヒタと打つ 風の鬱
首垂れて風の奴隷の如く行く

第二回川柳Z賞・佳作(50句より)

長崎県 濱田玲郎

キラキラと遊び呆けの男ら還る
一月某日晴天と書く妻逆う
坂は夕焼老婆ヒタヒタわが眼底
稲光り枯野の向うまで真冬
山脈昏れて冬の夫婦の影絵かな
如月や男にもある哀しみよ
少しみじめに如月の飯をくつ
人攫い三月某日妻攫う
芒々と婆来てならず鉦ならず
枯野往く一日は晴れそして縊死
如月の山門不幸他人のまち
逃げ水や男に涯のあるばかり
倅せ遊びばくら夫婦も二度三度
蒟蒻の好きな男とポケットベル
冬の絵の中の黄色を大切に
誰れを哭かそかやはり男を哭かそ
真夏日よ水より美味いものはない
そして真昼の炎天を往く南無阿弥佉
炎昼や苦しきれの縄一尋
影は吾が影炎天を往く一匹

第二回川柳Z賞・佳作(50句より)

東京都 山本忠次郎

反省を促しつづける裏山
生と死がぼんやり紙を裏返えず
はらはらと父のうろこが降り止まぬ
父の血清がなくなった老年性痴呆
忽然と白紙に戻るカレンダ―
稲光り魚になりかけたじじい
老人の行けば行くほど灯の尖る
藪の中どんどん父が死に遅れ
討たれ易い今週の尖った顔
野に埋めた歯がいちどきに生え揃う
秋の夜の待合室で髪をびる
腐肉が笑い出す待つ火花
漂流を続ける父の熨斗袋
突然ですがと帽子をとる神様
足音ばかり進む老人のデモ
磊落な神とまじろむわが命
血を垂らす心変りが始まるよ
体内の信じられないエルニーニョ
母の踵と父の踵と挟まれる
母の胎内花束の多少かな

第二回川柳Z賞・佳作(50句より)

西川富恵

初雪やとどこおりなく一つの死
水の流れに滲んで消えてゆく帯よ
風を立てば風のいのちに添うごとく
ねんころり母を乳母車に乗せて
朝の川に流しつづける母の髪
母の死を跨げば福寿草うう
胸の灯りに照され亡母のいる景色
母を敵に回せば燃えてゆく影よ
彼岸花食べ尽したら亡母に会える
母の死後誰もふりむいてはくれぬ
菜の花の中でつまはじきにされる
駆けぬ雪割草が咲いている
死に軽く触れてこもり傘回す
重い方はいつも他人に持たせてきた
死のことに触れなくなつたスーパ皿
死者の手の温さ祭りは華やかに
たそがれの街に落ちてきた指紋
石投げて夫を疑つたりしない
夫ほど遠いものなし雪積る
抱き合ってもっとも近く死に対う

第一次通過作品十句抄(佳作以上除く)

句集「人間の森」より 北海道 新井笑葉

風を許して砂丘のいのち明日を抱く
叛旗だらりと風も孤独な位置にいる
花首が落ちる怖さへ四季がない
鱗刺ぐ構図へ生きる漁夫の修羅
星をかぞえて觸れ野心を燃えさせたす
叛逆の風車は哮る風を抱き
氷河敷きつめて世情の嘘に馴れ
自己主張終えて焦土へ帰る野火
ビルの影拾うサヨナラの街となる
身籠りの大地へ虹を詠歌する

福島県 小林佐登流

人生のルビを無学の母に聞く
エプロンのポケットは母の知恵袋
病む母が居て気をつかう塩加減
おふくろが米と小言を下げてくる
指得は見えない父の顕微鏡
波風を立てぬ女房の地味な柄
年上の妻に合せて地味を着る
着る服で悩む女房のショッピング

力では負けぬが妻に言い負ける

A面の顔で出かける参観日

三重県 石田寿子

シナリオのひとつは愛でひとつは憎
ゆめ無限白い手紙が降ってくる
影踏み影のぬくさにたじろぎて
山桜魔女が淋しく顔洗う
呼びすててくれる人あり風の中
泣いてしまえば枯葉となるか冬の蝶
試写会に行くコートの襟についてゆく
風の天緑野に風の子を放つ
マドンナの疲れをみんな知っている
名刺の裏に生涯ひとりとして書いておく

福島県 江尻麦秋

太陽も地球もまとも風狂う
肩の力抜いたら視野が広がる
感情的になって子宮で考える
深刻に悩んだ果てのマッサージ
直線に歩む扁平足の父
古椅子におんなの羽が落ちていた
飽食が霊長の影沈ませる
靴底に卑屈な笑い踏みしめる
霊園のポケットベルを置いてくる
少年の死角に父の唄がある

第三回川柳Z賞・作品募集あんない

作品 ①自由吟 五十句を五組

②句集 五部

未発表、または59年以降の作品

賞 正賞・一名 十万円

準賞・一万円 秀逸・千円

選考委員(第一次・県内)

宮本 紗光 柏葉 みのる
小野 公樹 工藤 寿久
西山 金悦 高田 寄生木

選考委員(第二次・全国)

泉 淳夫 奥室 数市
柴田 午朗 片柳 哲郎
寺尾 俊平 山村 祐
時実 新子 尾藤 三柳
橋高 薫風 杉野 草兵

締切り 昭和六十年一月三十一日必着

参加料 不要 発表誌「かもしか」希望

備考 の方は郵券60円15枚封入下さい

自薦他薦を問いませんが他薦の

場合は本人の了解を得て下さい

応募作品はお返し致しません

送付先 039-52青森県川内町浦町高田方

川柳Z賞選考委員会

選 後 に

柴 田 午 朗

現代川柳が除々に近代詩に近づいてゆき、廿一世紀には口語発想系の俳句、川柳、一行詩等への連絡機構も実現して各エコー(流派)はそのオリジナルティを保ちつつ、巨きなジャンルとしてまとまるのではないかと山村祐氏は言っている。

この度の応募句を拝見してゆくと、山村氏の言葉も宜なるかな、と思わせるものがあるが、さりとて私にとっては、川柳への郷愁のようなものがむしろ深まってくるのは、やはり年齢のせいかもしれない。詩であることよりも、川柳であることを重くみるということが、若干甘いと思われる句に点数をいれるという結果になりはすまいか、亡反省しているのだが――しかし私にとって、急速に川柳が純粋な一行詩に近づいてゆくということは何としても淋しい。

この頃のNHKテレビの川柳放送を見てみると、やはり一般の川柳に対する認識はのくらしいかな、と淋しくなるが、しかし事実であるから、専門の川柳誌だけがひとり「詩」

へ突走ってみてもどうすることも出来ない、と思っている。

――佐藤岳俊氏

土のうた、百姓のうたである。私自身が数百年続いた泥土の中の家生きていたので、どうしても共鳴するものが多くなるのはやむを得ないと、若干寛大な気持でいる。

○百姓の思想を抱ける泥落ち穂

○胃に妻子ぶらさげ渡る朽ちた橋

○一本の蛇になるまで縄を綱う

○雪に立つ戦没農の墓ひとつ

○鬼の面刺せば村に生きる顔

――小野蛙人氏

作品はかなり川柳らしい五七五から離れているが、ここに響くものが多いのはどういう訳だろう。私の甘さか、それとも句語の撰択のせいかな。

○目立たない鼻はポケットにしまつ

○蟻が担いだ天は重すぎる

――海地大破氏

ここには人間が描かれている。いわゆる難

解句のないことにも好感がもてる。
○胎内の記憶の青い川流れ
○少しづつ狂いはじめる妻の部屋

――野田伸吾氏

風を主題とした一連の作品だが、風の中にゆるる自分自身がよく描き出されている。

○風花や昨日に戻る何もかも

○折り鶴のひとつが欠けし 寒い天

――浜田玲郎氏

「詩」と「川柳」とのつながりについて、何かまだ切れぬものをもつ私のところに、むしろ甘えかかる一連の作品ともいえるかもしれない。

○少しみじめに如月の飯をくつ

○ひとりよがりの男に冬の稲妻よ

☆ ☆ ☆

正賞 29点 酒谷愛郷(佐賀)

準賞 28点 古谷恭一(高知)

準賞 21点 海地大破(高知)

秀逸 15点 佐藤岳俊(岩手)

秀逸 11点 工藤寿久(青森)

秀逸 10点 北野岸柳(青森)

佳作 8点 桑野晶子(北海道)

感 想

山 村 祐

一読して感じたことは、わたくしごと川柳の域に止まっている句が眼についたこと。心に溜った思いを吐き出すのが詩であり川柳であるからには、わたくしごとから発するのは当然だ。しかしそれは句の入口にすぎない。素材のなかへ、どのように作者の思いがこめられて、にんげんの生きてゆく姿が、抽象の域へまで昇華されたか。具象(具体)と抽象のダブルイメージの響き合うところにこそ、一行の省略された詩形の妙味が生れるのではあるまいか。

柳人にはその人独自の、それぞれの思いがある。それが句の個性化となって現われるのであろう。もちろん一句の独立性は前提条件だ。しかしそれと共に、一句のみでは窺いきれない作家の個性の幅と深さ。特色ある作家の全貌を浮びあがらせるためには、少くとも数十句をまとめて読むことによって、始めてある程度までが理解できる。Z賞の存在価値はそこにある。

また柳界では、評論や批評活動というもの

が、作器活動と同じく創造的であり、しかも作品創造とは別の才能であることの認識がうすい。作家論などごまごまとまった労作の少いはそのためであらう。

個性的な作家ほど自分自身の深い人生観を懐いている(それを思想と言ひ替えてもよい)が、もちろん体系的哲学をさすわけではない。一句のみで作家の全貌を知ることにはできない。すぐれた作家の諸篇を読んで彼の主題――生きざまが浮びあがってくるのである。

ほとんどの句会が題詠でしかも個人選で行われている柳界の現状は、ともすれば断片的な、その場限りの句の量産を助長している。それ故、句会の達人と称される作家のなかでも、一冊の句集としてまとめられてみると、読後感が意外なほど個性的でない例がある。彼の人生への思索的な裏打ちが弱いからであらう。逆設的に言えば、技巧のうまさを感じられる作品は、また十分に熟していないから、という言い方も許されよう。

今回第一位に推した酒谷愛郷氏の作品50句

- 佳作 7点 吉田州花(青森)
- 佳作 6点 神谷三八朗(愛知)
- 佳作 5点 須田尚美(埼玉)
- 佳作 4点 小野蛙人(ラジル)
- 佳作 4点 野田伸吾(福岡)
- 佳作 4点 濱田玲郎(長崎)
- 佳作 4点 山本忠次郎(東京)
- 佳作 3点 西川富恵(高知)

※第二次選考の採点方法

- ①六點 ②四點 ③三點 ④二點 ⑤一點

☆ ☆ ☆

は、亡き父母たちを透して、作者の人生への思いが一貫して感じとれ、具象から抽象への昇華がにじんでいる。柳界の将来を背負う作家の一人として、今後共にいよいよの充実を心から祈っている。佳句数句抄出してみよう

父の掌の雲がカラリと晴れている

地に眠ろうか 木に登ろうか 父の助

夢の中の 杭一本を 打ちあぐむ

父の代から暗い厠に点し立ち

水に手入れて むんずと握りかえされる

総ては明日の 木椅子が一つ 置いてある

選後感

時実新子

なぜこうも「父」が意識されるのだろうか……というのが一番つよい選後の思いであった。

その父は暗くて弱く、そのために己れの父親をだぶらせようとする。妻を呼び寄せ凭れかかるとうする。子に抗しては敗れ果てる。

詩は負の立場から書かれようとするものだけれど、作者である父たちの弱りは少し異常とも思えた。

解放されたひとつの個として自由なイメージにあそぶ作品もあるにはあったが、これはこれでまた概念を出ようとする。どこまで暗いのだろうか。

川柳はいま、この点について考え直す機に立っているのかもしれない。もっと自由に、したたかな飛翔を、しかもそれは地に足のついた生者の魂の解放でありたい。

第一次選考を経た十九名の中に四名の女性作家があったことはうれしい。右の「父権」に較べれば、したたかさに於て一歩先んじた感があるのもうれしかった。

終戦日 打ち上げられた藻の長さ
木の瘤が生まれんとしてわが軋み
吊ランブ崩れるものがやってくる

古谷恭一の確かな自己把握を推す。彼の目が捉えたものは必ず彼の心の中で再生されて、いのちを与えられていることに注目したい。作品の一つ一つがよくも悪くも作者のものになっていることは、たやすいようであらうということではない。ムリのない舌ざわりもすべりすぎず、よくまとめられている。

野に埋めた歯がいちどきに生え揃つ
目撃者遁走せさせと朝顔咲く
複眼をばりばり踏んで眠らせる
骨っぽさの中に奇妙な愉しみを与えてくれる
山本忠次郎作品。一歩あやまれば奇をてらう
ものになりかねないところ、よく踏みとどま
って、その個性(主張)をゆずらないところがよい。

寒い夏はずんだ手 受けそこね

寸感

奥室数市

第二次選考に残った句について総的に言えることは、選考に頭を悩まされる句がなかったことである。実験的な、つまり将来の川柳を指差するような句に巡り会えなわった。

何十年か前に中村富二さんが「川柳に残されたものははや技術しかない」と逆説の意味と多少の不安を見越して発言したことが、現実となって表れていることは確かである。

そうなるも現地点では技術の上で作品を見るより方法がないということ、甚だ心もとない状況である。今は現代川柳の総仕上げの時代とは思いたくないが、普遍性をもってしまった作目群に接してその感を深くした。現代川柳も一定の価値基準や法則が出来上り作家の体の中でリアティーを失い、作品が装飾化の傾向を辿り、結果として作品が作者の外で演劇化しつつあるようにみえる。

その中で、私の選んだ作品は、勿論技術的には秀れているものの、作者の小さい詠みの世界の中で、「精一杯「生きて在る」ことを示してくれた点で選んだ。

・海地大破作品

文語発想の色合いが濃いことが気になるが、作者の持つ風景の喩は十分に具体性をもって「かな」「焚きぬ」「妊りぬ」等が単なる詠嘆として置かれているのは納得できない。読者へ想いをつなげてゆくには詠嘆を逆手にとって、詠嘆に酔い勝ちな自身を笑い飛ばす諷刺態度があってもよい。

・酒谷愛郷作品

重厚な語り口と軽口とが適当に混り、大へん面白い作品であり、大破作品と甲乙つけがたい。冒頭三句の良き物語は快調であったが、四句目の「狂いしは 一夜童子の 父太鼓」の美意識なるものとつづく「死ぬときに流れる さのさ 都々逸が」の飄逸すぎる差が私の頭を混乱にみちびいたことは確か。

・古谷恭一作品

表現は非常に柔軟で、二物衝撃の作法も十分に識り尽くして、画く世界も多様であるが、「嫁はいないか」「じゃがいもの貌」「電柱に繋がれた犬」は安易過ぎないか。

燃えつきたリング外せば秋の七草
見届けるまでは離さぬ紅の数珠

吉田州花の「愁まで女」を愛す。その性、まだ十分に吐き切っていないが、女流の多くがあまりやすい等辺の抒情を脱けて、女という性にひそむ未分化なものを仄かに感じさせてくれた。

雪原に一声吠えて戸を閉める
死者の背にざんぶと掛けるお立ち酒
人一人死んでも通う珠算塾

川柳のたのしさ、おもしろさを、風土の匂いと共に届けてくれた工藤寿久。「おもしろい」は文芸の根である。但し、「喉のあたり」「斯くの如し」などの「の」抜け、漢字、送りがないの正確さなどは戒とされた。

裸婦像の眸の中あるき遠糸糸
シャンデリア 唯我独尊たりえしや
ぼたん雪 古い帽子は忘れよう

桑野晶子の視野の広さ、心象と具象のからめ方のうまさ群を抜いていた。ただ、それは物と心の合作の絵とはなり得ても、作者自体の色彩としては定まらずの感を惜しんだ。

・桑野晶子作品

歳時記に託す心に未練があるように見受けられたが、女性特有の視野の狭さから抜け出たところで物を云っていることが好感をもたことと、身構えない風土性もよい。

・佐藤岳俊作品

ともすれば作品がアジテーゼになるところを押えて、「百姓の思想を抱ける泥落ち穂」「粟束でつつむ凍死の農の首」は単なるブランドに過ぎないが、読者の怒る場につなげている作法は時事川柳の在り方と、そして風土性をも考えてゆく上で指針となり得る作品

工藤寿久作品も同じ世界を画いてはいるが、寿久氏の作品タイトルは一連の作品とさして関係がないように見つけられたし、発想の基盤となる「往き斃れ 北津軽郡葦野村」は地名そのものに作目化する前に惚れてしまったという姿勢はどうか。石田寿子作品には未だ抽象が自分のものになっていない作品が二三あったし、野田伸吾作品の「風」一連の文語美文調は余りにも抒情が勝ち過ぎて、むしろ現代俳句が継承してきた世界ではないだろうかと思つたし、西川富恵作品は死を軽々しくあつかいすぎる点が少し気になった。

選後感

橘高薫風

第二回川柳Z賞の選考は別表の通りである。私自身の三段階の採点法と、一つのテーマとしての訴求力の有無を加味しての加点を総合して順位を決めた。

北野岸柳

採点でもすれば抜けての一位だった。

青津軽人も仏も頬かむり

捨て猫へ節縛立てり我が東土

などの作品だけでなく、「敗けてもともと」

「死ぬこと」「父として」「流木で」「空

席を」「行きずりの」「神棚は」にも、北国

の匂いが感じられ、風土に腰を据えた重厚さ

(それは昨年にも触れたことだが)、作者の

作品に対する姿勢の正しさを高く評価する。

作品は、先の二句に加えて、

神棚は白木造りで母の陰

影や影裸族の夕餉たりしかな

死に急ぐ頬杖だけの置き忘れ

が格別だ。今後、作品の重さをいよいよ加え

られたい。言葉運びに習熟して、言葉遊びを

排することだ。

古谷恭一

終戦日打ち上げられた藻の長さ

まぼろしの一騎牡丹を過ぎてゆく

この作者の今回の応募作品は、現実性を踏

まえた浪漫主義と言つか、現実・ロマン・機

知・批判などが、よい調和を保っている。

殊に、ウィットの牙えが目立っている。

美しい館ひっそり蛇が殖え

セメントが固まって薄笑い

寝袋の中から霧を吐きつづけ

酒谷愛郷

亡母の魂か家中を鶏あるく

父の死後風の酒屋の沙汰がなし

水に手入れてむんずと握りかえされる

「亡母の魂か」以下の終章の句は、中にや

や甘い感傷も交るものの、私の心を強く打っ

た。暗い句の多い作者だが、深刻ぶるとかえ

って力が弱まるものだ。

おくやみのひとり芒の匂いする

葬儀屋が午後から風になるといふ

工藤寿久

雪原に一声吠えて戸を閉める

出稼ぎの髭を剃らばや茄子の馬

一人病み一人酒飲む同じ屋根

この作者も風土を詠うて味がある。実力は

上の海地大破が落ち、後輩の古谷恭一が入選

したのは、大破の作品の出来にむらがあった

のだが、そのことはこの作者にも言える。

「はまなす」「三味線」「縊死をした」など

の句に注目した。

神谷三八朗

柿の木に柿葬儀屋は釘を打つ

帽子屋を喰い詰めてきた手品師か

この作者の哀えぬ意欲に畏敬の念を抱く私

だが、「雨だれ」「欠けた皿」「さびたナイ

フ」などのユニークな感覚は、若い作者を凌

ぐ。何時までも後輩の作句の指針となって頂

きたい。

入選の結果と選後感のほかに触れておきた

いは、応募作品は、正しく丁寧に書いて頂

きたい。それも応募の資格の一つと考える。

桑野晶子作品の名に昌子とあったのは事務

局の手落ちだろうが、これも苦言を呈してお

く。吉田州花・江尻麦秋の作品が次点だった

が、来年を期待したい。

消極的な推薦

尾藤三柳

第一次予選通過作品の性格を真に知るためには、不通過作品についてのデータも、多少与えられてしかるべきではなからうか。

賞の対象として求められるのが、何よりも現代川柳としての安定した水準であるとすれば、一九作品はいずれも、それに相応しく安定している。おそらくは、第一次予選によって与えられた、この見事なる「安定」に順位をつけるということが、それではどんな意味を持つのだろうか、と思ったりもする。

安定の中で順位をつけるとは、よりよき安定を求めるといふ虚しい撞着ではないのか。

われわれは、形式の中に絶えず安住を求めようとする定型詩の宿命を背負わされているが、その十字架を身に引き受けたいうえで、なお貧欲なまでの自由と、あくなき可能性に賭けて新しい詩的原野に分け入ろうとするのが現代作家のあるべき姿とすれば、それは安定とは対極にあるはずである。

ある種のユニークさや未完成の粗さが、予

選の過程で摘みとられ、地ならしされてしまったとは、万が一にも考えたくないが、もうすこし「安定しない」作品があってもよかつたような気がする。

というのも、せっかくの企画であるZ賞を半分死んでいる老大家のこの上ない安定に与えられる何とか勲章のようにはしたくないからだ。Z賞はもっと血なまぐさくあっていいと思うのである。

そんな思いもあって、手許に残った八点についても、あまり積極的にはなれなかった。

今回の一位は、そういうわけで、消極的推薦ということになる。

海地大破氏の作品の魅力は、ある意味での雑居もしくは表情の豊かさにある。提出の五〇章には、口語系と文語系が相半ばしているが、はつきりと前者がすぐれている。

泣いて笑って滑ってしまっ雀たち
胃袋に煙突並ぶ父らの風景
などのふくらみに比べると、

夢売りの夢が欲しくて火を焚きぬ
ほかの文語系には、コトバそのものへの酔いが目立ち、なかならず四つの「かな」は、それを取ると、たちまち生き生きする。

以下、Aブロックに、神谷三八朗、須田尚美、佐藤岳俊、小野蛙人、Bブロックに、桑野晶子、工藤寿久、野田伸吾を絞ってはみたが、どの作群にも決定的なアピールは感じとれなかった。反面、それぞれの作品が、それぞれの世界で、居心地よさそうに「安定」している姿だけが、眼に残った。それでいて最終的に順位をつけたのは、このかなしい営為への一種の自虐ともいふべきだろうか。

句集での参加は、規約として一考を要すると思う。作品数の面でも、視覚(活字)の面でも公平を欠くし、銓衡もしにくい。参加者はあくまでも作者自身の手で自選五〇章を書き抜き、同じ条件で対決に臨むべきだろう。句集とは、好むと好まざるにかかわらずカタチとしての安定である。そのカタチのままで自化の評価を求めるとは、自分以外の参加者に対しても、銓衡者に対しても、素朴さを失うものではないか、と考えるのだが。

群れる腕よ

寺尾俊平

私の住む町に、はだか祭りという奇祭がある。決してストリップのことではなく、真冬の深夜にはだかで種一つの数千の男たちが、二〇センチにみたない宝木という木片を奪い合う行事である。その祭りの最高潮というべき宝木を投下する直前にすべての灯りが消される。そして一堂にひしめき唸りをあげていただかの男の喚声が一瞬おさまるかえり、ひしひしと萬本ともいう腕の林が宙をさまよひ投下される宝木を求めて揺れ動く。揺れて佇立するすべて腕は孤独そのもの一本一本であり、孤独であるが故にその腕の動きは凄絶である。

○ ○ ○
第2回のZ賞候補作品をすべて選別した。選をしているとき、私は前述のはだか祭りの深夜の腕の揺れ動きを想起した。

○ ○ ○
「ああ、ひたむきなのだ。」
第1回のためらうごときものが消えていて作品そのものが勝負に出たという印象を強く感じたからであらう。

○ ○ ○
と、まあよい気分である中で申しあげるのはなんであるけれども、印象だけでは評価できない如く、作個々にわたって対決するとやっぱりヘタクソだなあと人の好い私は当惑するばかりであった。とにかく選出した作品は、ごらんの通りであったが、作品群そのものの差はあまりない。

○ ○ ○
古谷君の作品は、一回めの審査では落選していた。二回めのときに一等だと思っていた。
。電柱に繋がれた犬 日が暮れる
北野君は去年よりもぐんとよくなっているのがよくわかった。北野君が楢山を句にするのは卑怯だと思つた。

○ ○ ○
。花束を非常階段から貰う
浜田君は泉流の川柳作家であるが今回は、愛郷君をしのいだ。よくやった。

○ ○ ○
。冬の絵の中の黄色を大切に
桑野さんは、一回めは落選であった。二回めで迷い、そしてよいと判断した。何回も苦

しむべきであらう。ことばのみでない句をたくさん書いて下さい。この人の発見は私にとっては大収穫であった。

○ ○ ○
。母の絵の一枚いもの煮ころがし
山本君は、句のうまさではバグンである。テーマをしぼって主題を鮮明にすれば、コワイものはない作家のはずである。

○ ○ ○
。敵をみな許した足を責められず
以上、入賞の方の短評を申しあげたが、少しおだてすぎたかなとも考える。他の作家たちもみなよいものがあり、順位だとか評価点についても、十回選をすれば十回とも変化するかもわからない。ちなみに今回のZ賞作品は、一週間おきに五回だけ実施した。そのために迷ったのも事実である。但し、最初に申しあげたように投句者のひたむきさは感動以上のものが今後私の胸の底に住みつくことはまちがいない。川柳を志すものは、やはり川柳をひたむきで書かねばならない。己れのみ、自分のみが川柳を書きつづければよいのである。

選後感

片柳哲郎

抒情性は日本の短詩型文学の生命である。

この抒情性を無視してメカニカルな感情移入のない17字に想の深い、そして拡りのある作品は望めないと思つている。だが川柳家は同時に一つの錯角をおこす。平凡な人に代って10倍も悲しみ、10倍も苦しみ、10倍も惨たる思いをもつ眼鏡をかけて、歩いてゆくのだ。

Z賞50句の応募作品を拝見すると、正にその苦澁を思わすものが多く、右に左に体をかかわしての意外性強調の句語の採用がコモンセンスの導入なしに扱われていたりするが、一方言葉がもっている響き、その響きの葛藤にまで想を走らせた作品も少なかった。50句の規定は50句一連であつてこそ、その企画の良さと思つし、各作家の川柳文学思想を鑑賞するうえにおいて楽しく、決して秀句の数によって順位がきめられるものではないと思つた。

○ ○ ○
酒谷さんの作品は、妖しい細道、のシナリオが見える。作品の完成度から言えば昨年度Z賞の細川不凍氏の二連より粗雑さが散見されるが、この妖なるものは愛郷作品の根本な

のであり、誰に授けられた訳でもない自ら救われようとする手段の世界である。従つて視野は狭く、語いも乏しいが一貫して流れる思潮は独自の展開を包含していることを評価する。50句一連に致命的な一句は残さなかつたが、未完の現在も自覚して欲しい。

○ ○ ○
吉田州花さんの一連は逆に見事なほど完成されたものであつた。抑制された表現で、しかも物語性に考慮がはらわれていて読み易く吸収もしやすい。しかし今回は思惟もまた平易となった。これは決して悪いことではなく才女の性の共通点であらう。ただ削除して欲しい数句が奇妙に目立つ。そのために全編が平易な思惟と見なされる結果となった。

○ ○ ○
古谷恭一さんの50句を読んで労作したわりには軽く流されたと言つ感慨が僕には残つた。本来この作家の作品はその形態が重いのであるが、鑑賞者を正しく意識してひとつの工程を企られたのであらう。視覚的にも幽玄な姿を採り入れ面白いのであるが、短詩性のもつ重質感にやや欠けるものを感じる。それは17

字の中のテニオハ一字にも短詩の生命を左右するものがあるといふことである。しかし久しぶりにみた古谷さんの力作であることは疑われない。

○ ○ ○
工藤寿久さんの作品は確固とした存在感の充実した立派な一連であつた。この作家の作品を読むと何時も、力の限り、と言つ感慨を感じ風爽としたものを見る。今回のZ賞候補作品もその通りなのであるが、詩語としての採用のあり方にやや疑問を感じるものを見た。尤も名作家と言われた故中村富三氏もその一面を持って居られ逆に鑑賞者をねじ伏せる作句上の力をもつておられたことも事実であつた。

○ ○ ○
西川富恵さんの作品は、さきあげた吉田さんの作風と一脈通するものがある。しかし西川さんの方が未完の姿を露出している。荒削りなのだ。そこに面白さを感じ、極端な三文小説的でないのが良い。

○ ○ ○
その他では札幌の桑野昴子さん、岩手の佐藤岳俊さんの一連は最後まで印象すけてくれ、これからも発表される作品を充分注目してゆきたいと思つている。

選 後 感

泉 淳 夫

①酒谷愛郷 ②佐藤岳俊 ③海地大破
④野田伸吾 ⑤工藤寿久
酒谷愛郷——作者は殆どの作品に抽象手法を採っているが、視覚的であろうとする希いも持っていて、それが抽象化に当たっても躍動する映象となっている。

個に徹しようとする独自の表記法は、元来観念句に陥り易い、父を描き、母を描出しながら、なおしたたかな骨格を見せていて、立派である。

亡母の魂か 家中を鶏あるく
亡母も亡姉も 黙って雪を食っている

佐藤岳俊——個々の作品については、特に鋭覚的なものはなく、全体的に競詠の枠内にまとまっている感じであるが、強調されない詩の穏やかさが却って染み透ってくる。

壇輪の目のぞく宇宙の闇ひろがる
尾氈骨地に触れながら母歩く

海地大破——作者の力量は、各地で行なわ

れる大会に勝れた作品を残している、その多彩さに感心するが、氏には多彩さより真実感合の道を望みたいのである。

その豊かな表現力を見せる作者にして、句群の結語に八かなVの使用が四句にも及ぶのは何としたことであろうか、川柳作家として易易と八かなVを使わぬ位の自信を持って欲しいと思つ。

衰弱のはじまる縄が横たわる

野田伸吾——作者の本質は抒情にあるが、詩情の漂いは時として甘さを露手することであり、作中の女一連にもそれが散見された。

一体に暗い作品によって占められる柳界に、その抒情性を若き日の歩みとして止めて置くことも、成長の過程ともなる。

片隅の風も静かに食べている

工藤寿久——作者の句の書き方の重厚さは、前回に続くものであって、それが題名の八北津軽郡 葦野村Vにも見えている。

真つ正面から詠い上げる土俗性に、インク壺、直訴する、腹話術、砂時計等の観念語の混入は、第一回の作品には見当たらなかったように感じられて、それが氏の本質でないだけに惜しまれてならない。

往き整れ 北津軽郡 葦野村
順位をつけて選ぶことの至難さは、濱田玲郎、北野岸柳、桑野晶子、西川富恵の諸氏を逸したことに残った。

杉 野 草 兵

- 第一席 古谷恭一(高知)
- 第二席 酒谷愛郷(伊万里)
- 第三席 工藤寿久(弘前)
- 第四席 西川富恵(高知)
- 第五席 神谷三八朗(名古屋)

※今回も、また、県内外の選考委員の方々のご支援により成果を上げることができました。また、募集要項をご掲載下さった全国の各誌と共に心からお礼を申し上げます。(事務局)

北の角笛 ④7

村 田 けん一

老樹ふともらす吐息が風になる
 芒原揺らし亡者の駆け抜ける
 偏東風吹く杉木立から海になる
 けもの道けものとなって人もゆき
 けもの跡狩猟の民の血が動き
 切り株の皆ひたすらに南指し
 革命の刃に繁き草を刈る
 弦月に研がれし鎌の先の首
 厳冬の森にこだます矢追い音
 森深くなりて一人の侏儒となる

「 花 」

春、残雪を踏みしめながら山に入ると、真つ先に咲いているのがマンサクの花である。

「満作」(あるいは「万作」とは大層景気のいい名前であるが、実はこの花、余り見栄えが良くない。遠見には黄色い霞の如くに見えるし、手にとって見ても桜の花などと違って、咲く、という実感のあるものではないのである。まるで菊の花をむしり取って残った何本かが萎びている、という感じである。

「葦」(アシ)を、悪しに通ずる」ということから忌み詞として(ヨシ)とよばれることとなったように、実りのない花・ケガズ(不作)の反語として「満作」とよばれるようになったという人もある。してみると、「経済大国」だの「福祉国家」だのといわれるニッポン国の実態は、マンサク、デネベガ。(けん一)